

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
共同プロジェクト研究

2022年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏名					
	文学部・教授		河野 哲也					
研究課題	アートパフォーマンスの間身体性現象学							
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2023年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏名					
	中京大学・国際学部・教授		長滝 祥司					
	東海大学・文化社会学部・教授		田中 彰吾					
	武蔵野美術大学・造形学部・教授		杉浦 幸子					
	本学現代心理学部・教授		白井 述					
	東京交通短期大学・運輸科・専任講師		佐古 仁志					
	本学文学研究科・教育学専攻・博士課程後期課程		日向 悠太					
全研究期間	2022年度 ～ 2023年度							
研究経費※ (上段:支出金額)	2022年度		2023年度		年度		総計	
	2,825,418	円	0,000,000	円	0,000,000	円	2,825,418	円
(下段:採択金額)	3,000,000	円	3,000,000	円	0,000,000	円	6,000,000	円

※1円単位で記入

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、哲学、認知科学、心理学、美学等の分野を相互に参照しながら、人間が、アートパフォーマンスにおいて、どのように現実界と想像界の往還を経験するのか、どのように自分の身体的存在の更新を経験するのか、パフォーマー自身と観客の当事者の視点から、その身体経験を現象学的・質的に明らかにすることを目的とする。

初年度は、何よりも大型の外部資金研究費を獲得すべく、本研究全体の枠組みを論じなおしながら、研究分担者それぞれが、新しい展開を見出すべく研究を推進した。河野、杉浦、佐古は、コミュニケーションを全身体的交流として理解し、その実践をアートや自然経験、あるいは臨床的方法についての対話の中に見出す研究を行った。田中、白井は心理学の立場から間身体性の実証実験を踏まえた研究を行なった。河野、長滝、日向は、対人スポーツ(武道含む)における間身体的交流を、スポーツ学、心理学、教育学の知見を踏まえて、データを集めながら現象学的方法論の発展を試みた。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[間身体性] [アート・パフォーマンス] [現象学]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

今年度は、計画の通りに、それぞれが担当する研究を行いながら、学会での共同発表やシンポジウム、研究会や例会などを通じて成果を共有しながら、大型科研費などの外部資金への申請を行なった。残念ながら、難関の大型科研費は採択までは至らなかったが、今後につながる新しい研究の展開が見えてきた。

河野は、第一に、教育活動における対話を、スキルを伴った身体的パフォーマンスとして理解する立場をとり、教育実践を映像・音声を記録して、それを独自開発したアプリケーションで分析する作業を行なった。記録は、江戸川区のこども未来館での実践、各地美術館での鑑賞型対話、「総合的な学習の時間」と関連させた沖縄での複数の小中学校での実践を記録してデータとして利用した。また特筆すべきは、2022年8月に、対話的な哲学教育に関する最も大きな学会である「子どもの哲学国際学会」を、河野を実行委員長として立教大学で実施したことである。第二番目は、武道を身体的なアート・パフォーマンスとして理解する理論的考察を行なった。K.シャトルワース氏、P.ランベルティ氏、M.フランコ氏のようなヨーロッパや南米の実践家でもある研究者と共同して、武道の国際的・多文化的な文脈において武道を理解する枠組みを構築する議論を、オンライン・対面で研究会を行なった。また、R.フレミング氏から、東洋思想の身体性にみられる伝統的古層(狩猟、生贄、憑依など)についての研究報告を受けた。間文化的な視点からの身体性の理論発表の場として「顔身体学」機関誌の *Philosophy and Cultural Embodiment* の編集を行なっている。

長滝は、近年、さまざまなスポーツやアート・パフォーマンスにおける身体技能の実践が、スポーツ科学だけでなく、認知科学などを中心に盛んに研究されるようになってきたことに注目した。そこには、身体を機械として捉え、技能を徹底的に数量的に把握し、反復できるように固定していこうとする研究方向と、そうした方法では捉えきれない身体技能やパフォーマンスのもつ質的側面や一回的側面を捉えていこうとするものがある。身体技能やパフォーマンスが一回的で、数量に還元できない質的な側面をもつように見えても、そこに関わるひとびとは一定の共通理解に至り、ある種の客観性ないし再現(可能)性を得ていることも事実である。それらのひとびとの複数主観において再現されている可能性がある、という意味である。本研究では、サッカーのゲームに典型的に見られるあるシーンに注目して、指導者と選手が戦術的な共通理解にどのように達しているか、指導者の言語表現に焦点をあててその解明の手がかりをつかむことを目指した。その成果は、2回の学会で発表することができた。今後は、自然言語の分析について、データ収集を方法的に洗練させることもふくめて、さらに改良を行うつもりである。

田中は、メルロ＝ポンティによる「間身体性」の概念を手がかりとして、コミュニケーションおよびスポーツの分野で関連する研究を行った。①コミュニケーション分野では、2020年のパンデミック以降急速に拡大したオンライン会議システムを対象として、対面でのコミュニケーション時と比較して間身体性の発露がどのように異なるのか検証する研究を行った。具体的には、3人での会話を題材に、対面での会話とZoomを用いた会話の録画データをもとに分析を行い、前者が視線と対人距離の要因に強く影響されるのに対し、後者では発話と沈黙のタイミングに強く影響されることを明らかにした。結果として、対面では同じ「場面」を共有してコミュニケーションが展開するのに対し、オンラインでは言語的な「連想」を共有してコミュニケーションが展開するとの考察を得た。②東京パラリンピックの視聴経験の一人称的分析をもとにして、障害のある身体と障害のない身体の間で生じる間身体的経験について現象学的分析を行った。この分析をもとに、障害者スポーツを推進していく上で、障害者と健常者のつながりと共感を推進する環境デザインのあり方について提言した。

杉浦は、2022年度、以下の鑑賞プログラム(プログラム数6、参加者総数229名)を実施し、動画記録から特徴的な鑑賞アティチュードを抽出し、参加者へのアンケート、インタビューから得たフィードバックを分析中である。特に1歳から5歳までの乳幼児に同じアート作品を接触させることができたさかえ幼稚園に注目し、次年度に同個体および同学年の変化を比較・分析するための手法を開発中である。①町田市立国際版画美術館「鑑賞プログラム」、2022年5月7日、②武蔵野美術大学美術館「みんなの椅子展」乳児との鑑賞

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

プログラム、2022年7月28日、③さかえ幼稚園(福島県いわき市)とオンラインでの幼児を対象としたアート作品鑑賞プログラム、2022年10月28日、④太田市美術館・図書館「2022 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」関連イベント」、2023年1月7日。参加者29名、⑤さかえ幼稚園(福島県いわき市)乳幼児を対象としたアート作品鑑賞プログラム、2023年1月25日、⑥町田市立国際版画美術館「子ども講座 みてみてつくろう 自然の絵本を作る」鑑賞プログラム、2023年3月25日。参加者30名。

白井は、拡張現実技術の一形態である「空中像」による視覚情報の提示が、ヒトの認識や行動にどのように影響するのか、特に心身ともに成熟の途上にある子どもではどのような反応が生じるのかを実験心理学的な手法によって検討した。コンピューターグラフィックスによって生成されたキャラクターとインタラクティブな相互作用が可能な映像コンテンツを作成し、空中像と通常のディスプレイ(タブレット端末)それぞれを通して参加児(6 - 9歳児、60名)に提示した。その後、空中像・タブレット条件のコンテンツのどちらを参加児が選好するかを、口頭報告を主たる指標として評価した。その結果、両条件間でコンテンツの内容は同一であったにも関わらず、空中像によるコンテンツ提示に対する有意な選好が認められた(両側二項検定, $p < 0.003$, $g = 0.20$)。これらの結果は、空中像による視覚情報の提示が、タブレット画面のような従来型の装置による視覚情報の提示と比較して、子どもの関心をより惹きつける可能性を示唆する。

佐古は、本年度は身体に根差した学習の視点から対話実践における基準作成のための研究と身体に根差した学習をシステムの構築・再構築としての愛についての研究を行った。教育の分野における哲学対話や精神療法としてのオープンダイアログなど対話実践が注目されているなかで、オープンダイアログには国際的なガイドラインやトレーナーの資格制度などが設定されているのに対し、哲学対話は活動形式、参加者と場の構成など多様性があり、技の伝承のように正統性や継承など本来の目的から外れたところで問題が生じる危険がある。そのため、新学術領域研究「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現」(17H06346)で開発した映像分析アプリを利用することで、対話実践のアーカイブ化を進めると同時にそれらを分析することで哲学対話の基準についての考察を行い、ワークショップとして成果を発表した。学習が他人の真似や見立て遊びのような広い意味での共感(投射)を通じてなされるということを一明らかにし論文の形で発表した。また、そのような共感を通じた学習を促進するものとしての対話について研究するなかで、それらが学習者というシステムをいかに構築・再構築するのかについて、共感を支えるものとしての愛(アガペー)に着目して研究を進めた。また、これに関連して以前英語で執筆した論文の日本語への翻訳を行った。

日向は本共同研究において、とりわけ体育学・教育学の現象学的方法の観点から研究を行った。研究当初はスポーツ科学の現象学的方法の不在に対し、スポーツ・パフォーマンスの質的・現象学的方法の提案を示すという観点において、スポーツ指導の体罰研究においても質的・現象学的方法が要請されているという現状把握から始まった。だが研究を通じて体育学の専攻研究において、現象学的方法を用いた体育・スポーツ学の先行研究の存在にたどり着き、今後の本研究分野が進展する可能性を示すことができた。金子明友は、スポーツ科学における人間科学の重要性を主張したマイネル運動学フッサー現象学を接続することで現象学的スポーツ運動学を展開し、スポーツ学・体育学における現象学的方法の基盤を創り出した。その影響は体育学における現象学的方法を用いる滝沢文雄、田中愛、石垣健二へと影響を与えた。さらにその石垣は、スポーツ運動学の試みに触れつつ、フッサー現象学を基盤とした現象学的方法や滝沢の現象学的体育学を、間主観性による現象学的方法として批判し、体育学が身体を土台に置く研究領域である以上メルロ＝ポンティの間身体性を通じて運動を理解する必要があるとし、間身体性の現象学的体育学を提案した。ただし身体性という観点は教育学にも例外なく存在し、教育学の身体的な側面を明らかにする一助となる一方で、教育学の独自性について新たな論点をもたらした。

※この(様式2)に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

1. 河野哲也、「哲学とは何か」『現代思想 特集：哲学の作り方—もう一つの哲学入門』Vol. 50、2022年8月号、pp. 72-79.
2. 河野哲也、「連載：答えのない時代を生きる対話の実践 1～12」『先端教育』2022年4月号～2023年3月号.

② 図書

1. 河野哲也、勁草書房、「第8章 対話によるコミュニケーション」、山口真美・河野哲也・床呂郁哉編『コロナ時代の身体コミュニケーション』2022年7月(241頁).
2. 河野哲也、アルパカ、子ども図書館司書+NPO 法人アオーダーコーダ編、河野哲也監修『こどもたちが考え、話し合うための絵本ガイドブック』2023年3月(120頁).
3. 河野哲也[監修]、菅原嘉子[文・構成]、ながしまひろみ[絵・漫画]、ポプラ社、『哲学のメガネで世界を見ると まんがで哲学 キミは学校に行きたい?』2023年3月.
4. 河野哲也、水声社、「第2章 怒りは道徳的に正しいか?」、pp. 61-86, 小川公代・吉野由利編『感受性とジェンダー』2023年3月(308頁).
5. 長滝祥司他、東京大学出版会、『心と社会』、2022年9月(272頁).

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

1. 河野哲也、第20回子どもの哲学国際学会シンポジウム、「なぜ、学校に対話が必要なのか? : 外部からの学校での対話活動の促し」、2022年8月8日、立教大学.
2. 河野哲也、第20回子どもの哲学国際学会シンポジウム:「総合的な学習・探究の時間と哲学対話のコラボレーション: 環境教育を中心に」、2022年8月8日、立教大学.
3. 河野哲也、第20回子どもの哲学国際学会シンポジウム「道徳科において P4C は可能か? : 教科書を使っての「考え、議論する道徳」」、2022年8月9日、立教大学.
4. 河野哲也、第20回子どもの哲学国際学会シンポジウム:「地方創生における P4C 実践と貢献可能性を考える」、2022年8月10日、立教大学.
5. 河野哲也、長滝祥司、日向悠太、科学基礎論学会科学基礎論学会 2022年度ワークショップ、「スポーツにおける間身体性の認知哲学・一回性と共通理解: サッカーの戦術を題材として」、2022年6月19日、オンライン.
6. 河野哲也、長滝祥司、田中彰吾、日向悠太、第44回日本現象学会研究大会、応募ワークショップ、「パフォーマンスの現象学・一回性と共通理解: サッカーの戦術を題材として(その2)」、2022年11月26日、オンライン.
7. 日向悠太、「体育学を通じた教育学と顔身体学の架橋」: トランスカルチャーとしての〈大人〉—〈子ども〉、顔・身体学第7回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況における顔身体学の構築」、2023年1月21日、東京外語大学.

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1. 金澤正治・河野哲也、「小学校道徳科における対話的方法の道徳的効果について」、第20回子どもの哲学国際学会、2022年8月8日、立教大学.
2. MORIOKA, Chiho and KONO, Tetsuya, Safety and Authority in Moral Education through Dialogue, 第20回子どもの哲学国際学会、2022年8月9日、立教大学.
3. 白井述・近藤理沙・小泉直也・田中恒彦、映像コンテンツへの子どもの選好に空中像表示のおよぼす影響. 日本心理学会第86回大会、日本大学、2022年9月8日～11日.
4. (図書紹介)日向悠太、「河野哲也著『知の生態学の冒険 J・J ギブソンの継承 2 間合い生態学的現象学の探究』」、『立教大学教育学科年報』第66号、p. 73、2023年3月.